

## 九 茶漬の味

金々先生といふがあつた。其の身貧にして人の富を羨ましく思ひ、明暮此事をくやんで居たが、これぞといふ商賣も渡世もせず、浮世を鰻屋のぼんだいの如く見なして、只明暮ぬらりくらり暮してゐたが、或時茶漬を一膳してやらんと、手づから煮花をしかけ其の茶の出来るうち、とろくと眠つて了つた。すると夢の中に一人の童子に誘はれ、何處とも分らぬ深山に來り、見れば四季の草花咲き亂れ、異香四方に薰ずる有様。そこへ一人の仙人が來て、古語にも恆の産なき者は恆の心なしといへり。吉田の兼好は自ら薙を織つて世渡したでないかと説いて、金々先生の怠惰を誡め、先づ暫く此山に逗留すべしと云つた。其の仙人の口上が長くて先生ひもじくてたまらず、先づお茶漬を頂き、それからお示しを受けたう御座りますと申した。さらばとて仙人が、これから茶漬の支度にかゝる。

併し何もないから始めから、何も彼も仕出さねばならぬ。そこで先づ柚の仙人が山へ入つて、茶漬の膳を拵へる木と、飯と茶を仕掛る水をくむ井戸側になる木と、釣瓶と手桶になる木と、香物を切る眞那板、釜の蓋竈の側包丁の柄、附木になる木を切りますと、それを木挽の仙人がひきわる。木地屋の仙人は膳の下地をこしらへて、ぬしやの仙人に渡す。ぬしやの仙人は漆屋の仙人から漆を買取つて膳をぬる。その刷毛を作る仙人も居る。それで漸くお膳が出来た。炭焼の仙人は茶を煮る炭をこしらへるために、荒つばい枝を集め、樵夫の仙人は飯をたく薪を集める。箸屋の仙人は茶漬を食ふ箸をこしらへ、陶物師の仙人は茶碗と、香物の鉢と手鹽皿土瓶をこしらへる。是も土こしらへから薬の下地、びいどろを粉にして薬をかける。その苦辛は云ふに言葉もない。鍛冶屋の仙人は香物を切る包丁、火箸しちりんの網などをこしら

へる。これも金山から鐵を掘り出し、鍛冶屋の仙人に渡すまでの苦辛は如何ばかりか知り難い。釜屋の仙人は飯をたく釜をこしらへる。百姓の仙人は香物になる大根の種を蒔く。これも大根になるまでの苦辛は、更に譬へやうがない。又茶摘の仙女は茶漬の茶をつむ、これも茶になるまでには大抵の事でない。

金々先生に食はすべき茶漬の道具は、先づ大體揃つたけれども、第一の米がなければ、百姓の仙人先づ田へ種をおろす。これが米を作る幕明の序開き、女房仙人嫁仙人老婆仙人、打ち交つて田を植ゑる。或俳諧師が句に「早乙女や夜も揃うていびき哉」と云ふも、晝のくばびれし様見えて、實に其の苦心も思ひやらるゝ。稻のだんぐ育つに従ひ、雷神風神五風十雨で稻に實を入れんと骨折る。「雷神の女房ほどせはしきものはなし、綿入物をしかけて稻妻を光らせる、是を思へば人間の女房が營養食したり、炬燵に首ツきりはいつて居たりするはあつぶてなり」。天上でばかり骨折るかと思へば「地の下にても地神といふものありて、多くの手下の地神を集め、稻の花を咲かせたりする機關の糸を引きたまふ」。神の恵みで稻に實が入つたれば、百姓の仙人之を刈りとりて、もみを臼で挽いたり、からざほで打つたり、何や彼して漸う米になる。金々先生、在所へ行つた様に、此體を見て秋の實いりをほめる。

それから汐くみの仙人は、香物をつける汐をくみて、鹽をこしらへる。糠屋の仙人は糠を、樽屋の仙人は樽を賣りに來たから、何も彼も揃うて、漬物屋仙人、かの大根を澤庵につける。搗屋の仙人は米をつき、桶屋の仙人、左官の仙人など、手桶米かし桶、まな板、米上げ箆、火吹竹、火打箱、竈などをこしらへ。井戸屋の仙人は、飯をたき茶を煮る水を取る井戸を掘る。是も足代やら鋤鋤をこしらへる辛苦數へがたい。澁團扇の仙人は茶を煮る、しち

りんを扇ぐ澁團扇を造る。それも竹から澁から團扇になるまでは、大變な手間である。

偕何も彼も出来上つたれば、飯炊の仙女、下女の仙人、丁稚の仙人、集つて、水をくみ、飯を炊き、香物を切り、茶を煎じ、様々辛苦して、漸く一膳の茶漬飯が出来上つたれば、仙人のお頭、是を金々先生に食はする。

金々先生はこの茶漬飯を拵へる多くの人の辛勞を、目前に見たものだから、膳にすはつて熟々思ふには、「僅かな茶漬飯一膳、たつた二切の香物といへども、幾萬人の手にかゝつたのか數へ盡されぬ。まして美をつくした料理なんどは、幾萬人の辛苦なるかは計り知られぬ。これを思へば家を造り着物を着る、人間一生入用の品々は、皆是れ幾萬人の辛苦を積んだのか。然る時は、紙一枚箸一ぜんも我物でない、皆天地より恵み給ふ所、米一粒も遊んで食ふは勿體ない事ぢや、あゝさうぢやなあ」と感心いたし、盧生は粟を炊く中に五十年の夢を見、我は煮花の出来る中、千萬人の辛苦を知つた。我が浮世を夢と思ひなして、只うかくと暮したるが、今日より心を改め天地へ恩を報ずるため、一つの渡世を始めやうと、是より一生懸命にかせいだれば、四五年たぬ内數萬兩の分限となり、後には夢にあらぬほんまの榮華の身となつたとある。(山東京傳『金々先生造花夢』)

讀者はこの話を何と讀まれるか。人にばかり働かして、人の汗水たらして造つたものを用ひて、自分は朝から晩まで、遊んで暮すといふことが出来やうか。我等は正にすべての犠牲の上に立つて居るのである。我等はすべての恩寵の焦點となつて居るのである。一念此に想ひ當る時、我等は多大の力を得て、自己の上に偉大を感じる事が出来る。之と同時に至大の恩寵を感受するのである。